

「原爆と戦争展」ついでに

広島と長崎に原爆が投下されてから六十六年目を迎えます。一瞬にして何万人もの命を奪い、また放射線後遺症により、将来にわたる苦しみをもたらした被爆の経験を私たちは決して忘れることはできません。また、日本全土を焦土と化し、三二〇万人もの尊い命を奪い、塗炭の苦しみをもたらした第二次大戦の記憶は、未来永劫語り継がなければなりません。

二〇〇一年、旧日本銀行広島支店で開催された第一回広島原爆展は、峠三吉が活動した時期の私心のない運動の原点に返り、広島市の被爆市民が本当の声を若い世代、全世界の人人に語り継ぐ契機になりました。それは、「原爆投下は戦争終結のためにはやむをえなかった」という原爆を落とした側から流されてきた風潮を払拭し、原子雲の下にいた市民の側から、その苦しみ、悲しみ、怒りを語り継ぎ、原爆投下者の犯罪を許さず、「二度と原爆の惨禍を繰り返させない」という全広島市民の思いを束ねる運動として継続されてきました。また、長年の沈黙をうち破って立ち上がり、今年で第七回目の「原爆と戦争展」を迎える長崎の被爆市民との絆をつよめてきました。長崎では、一昨年、原爆投下後1年目に長崎市民の手で二万体の遺骨が収拾されていたことが浮き彫りになるなど、これまで表にできなかった長崎市民の体験が溢れるように語られ、被爆の実相と市民の生の声をより広く後世に伝えていく全市民的な運動となっています。

また、この原爆展は、全国各地で開催される過程で、沖縄戦や全国空襲、戦地の体験とつながり、第二次大戦を網羅した「原爆と戦争展」へと発展してきました。戦争体験者、被爆者の高齢化がすすむなかで、当時の経験を語り継ぐことは急がれる課題であり、それを継承する若い世代の役割も大きくなっています。広島では、原水爆の廃絶とともに、再び日本を核の廃墟にさせないための広島市民の取り組みが、学生や社会人など若い世代とともにすすまれています。

三月十一日に日本列島を襲った大震災は、東日本のみならず日本全国

に激烈な被害をもたらしています。とくに、収束のメドがたたない福島第一原発の事故とその影響は、放射能で苦しんだ私たち被爆者の経験を広く伝えなければならぬことを痛感させています。被災地の人たちが自分たちの町や村を復興させるうえでも、原子野のなかを生き抜いて立ち上がってきた私たちが、その体験を語り継ぎ、平和で豊かな日本社会の礎にならなくてはならないと思います。

第十回目となる広島「原爆と戦争展」が、平和な未来のために第二次大戦の経験と広島長崎の本当の声を若い世代に語り継ぎ、日本社会を立て直すうえで大いに役立つことを願うものです。

二〇一一年六月「原爆と峠三吉の詩」原爆展を成功させる広島人会

会長 重力 敬三

「原爆と戦争展」パネル集

編集 下関原爆展事務局 定価1000円 Tel&Fax 083-232-0540



全国各地で開催されている「原爆と戦争展」のパネルを一冊にまとめた冊子「被爆者・戦争体験者は訴える——原爆と大戦の真実」が発行された。下関原爆展事務局が編集したもので、「第二次世界大戦の真実」「きけわたつみのこえ」「全国空襲の記録」「下関空襲の記録」「沖縄戦の真実」「原爆と峠三吉の詩」「敗戦 やつと戦争が終わった」「世界の平和運動の中心

に」「峠三吉」「磯永秀雄の世界」の柱で構成された一四八枚のパネルが教科書サイズで収められている。これらは2000年7月、下関原爆展事務局が第二回下関原爆展（主催：下関原爆被害者の会）のために作製したパネル「原爆と峠三吉の詩——原子雲の下よりすべての声は訴える」による原爆展運動が全国各地でくり広げられるなかで、随時改訂・増補を重ね、今日の原爆と戦争展にまで到達した。パネルの集大成である。

8年間の全国の原爆展の集大成

「原爆と峠三吉の詩」原爆展は、被爆者の体験に即して、峠三吉の原爆詩と峠が編さ

んした『原子雲の下より』に収められた子どもたちの詩をもとに作製された。広島、長崎はもとより、北海道から九州・沖縄まで、全国各地の公民館や学校などで、また全国キャラバン隊などの街頭展示を含めて全国数千カ所で開催され、この8年間で參觀者は数十万人にのぼる。

各地の展示ではどこでも、原爆の惨状と重ねて、その地の空襲や戦地での苦勞など、これまで表だつて語ることを抑えつけられていた第二次世界大戦の苦難が鮮明に思い起こされ、憤激とともに堰(せき)を切つたように語られてきた。これらの体験者の証言をもとに2005年、「沖繩戦の真実」「下関空襲の記録」「全国空襲の記録」の各パネル、2006年には戦地での兵隊の体験をもとに「戦争体験者は訴える——第二次世界大戦の真実」のパネルが作製され、原爆展の内容が一層充実、発展させられていった。

このたびの原爆と戦争展パネル集は、これら相次ぎ作製されたパネルをもとに全国の被爆者、戦争体験者がくぐつてきた時間的な流れにそつて、これまで語れずにきた貴重な証言と、最近明らかにされた資料などによつて構成されている。原爆投下の真実、第二次世界大戦の真実について、日本全国で語りあい、独立した平和な日本を建設する糧になることを願つて作製された。

戦後語れなかつた体験をもとに

このパネル集は「みんなが貧乏になつて戦争になつていった」と題する昭和恐慌当時のパネルから始まり、日本の戦争が中国への全面侵略戦争の泥沼のなかで抗日戦争によつて敗北していたこと、また「アメリカは中国侵略と日本占領を目的に参戦した——日本の侵略を懲らしめる解放者ではなかつた」ことが浮き彫りにされる。さらに、「日本の支配層は、負けると思いながら日米戦争に突き進んだ」ことが、戦地でのなまなましい体験から、またアメリカの「オレンジ計画」や真珠湾攻撃など日米開戦をめぐる公文書、日本の天皇の発言などで裏つけられている。

さらに中国やフィリピン、ビルマ戦線での体験者の目撃・証言などで、大本營の奇妙な作戦とともに、アメリカの中国・フィリピンなどでの無差別空襲などの残虐行為、日本の若者が食糧も武器も持たされず、さらには家庭を持つ40代までが戦地にかり出されたこと、戦死者のほとんどが飢えと病気で死んでいったことなど、これまであまり語られなかつた多くの事実が収録されている。

そして、18万人もの市民を焼き殺し、67都市の市街地を焼き払つた米軍の空襲、

下関空襲の記録などから、東京空襲では皇居だけが、各地で三菱や軍関係の施設だけが狙われずに焼け残つた事実も明らかにされている。そして、アメリカを賛美する側から覆い隠されてきた沖繩戦での米軍の残虐な犯罪を正面からあばいた真実、さらに、原爆投下の目的が、世界支配の野望のためにソ連を排除して日本を単独占領するためであり、そのための非戦闘員が密集する地域への計画的な奇襲であつたことが、「原爆投下は必要がなかつた」という米政府・軍中枢の要人の発言も引用して鮮明にあげられている。

敗戦後では、戦後の食料難などアメリカによる単独占領と戦後の対米従属下に置かれてきた人人の体験をもとに、日米開戦直後からアメリカで策定された「軍部に責任を負わせて天皇を傀儡(かいらい)として利用する」という占領政策、革命を恐れてアメリカに降伏し「平和主義」者のような顔をした天皇、官僚・政治家、財界の言動も紹介。今日まで尾を引いてきた共産党が占領軍を「解放軍」と見なした問題、戦前を上回るGHQの検閲についても、新たな資料で浮き彫りにしている。

こうして、原爆投下も沖繩戦も、全国の空襲や戦地での忌まわしい体験も、第二次世界大戦の一つながりのできごとであつたこと、そこにはアメリカと天皇をはじめとする日本の支配階級の許しがたい犯罪が貫かれていたことが浮き彫りにされている。

誰が痛恨の体験押しつけたのか

パネル全体を通して、アメリカと日本の支配層はアジアの植民地争奪のためにいがいみあい、320万人もの日本国民を虐殺したこと、同時に日米の支配層が結託して日本国民をだまして戦争処理をしたことが、今日の植民地的荒廃とアメリカの核戦争のために日本を米本土防衛の盾にする策動につながる起点となつたことを示唆するものとなっている。

また、1950年8・6平和斗争に始まる原水禁運動の発展が、世界の平和運動の中心になつたこと、全国各地で展開されている峠三吉の時期のような私心のない平和運動の力強い発展も紹介されており、独立と平和をめざすたたかひの展望を示すものとなっている。

この冊子が、全国の原爆展運動や平和教育運動はもとより、原水爆禁止・平和運動の壮大な発展を促すうえで、大量に普及され、旺盛に活用されることが期待される。